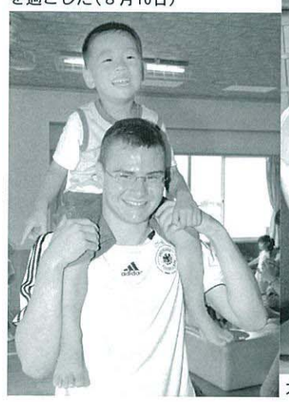
心から楽しむ
ド市学生の上山滞在に密着!!
湧く・ワク交流記

ド市にあるドナウ川の源泉「ドナウの泉」

市役所を訪問。（８月７日）中には５年前から日本語を勉強し、簡単な日常会話ができたり簡単な漢字が読めたりする男子学生も。学生の間で流行っている日本語は「ドウモ、ドウモ～」と「イイデスネェ～♪」だとか

明新館高校では琴の演奏や書道、米粉パン作りを体験。（８月10日）日本の高校生が制服を着ていることや、夏休みにも関わらず部活や補習で登校する姿を見て、ドイツと全く違う学校生活に驚いていた

大沢さん一家。左からみなみさん・みのりさん・義彦さん・みゆきさん・マックスさん・俊貴（よしたか）くん


にし保育園では、年長児と一緒に歌ったり踊ったりして楽しいひとときを過ごした（８月10日）

ドイツ人と過ごした真夏の12日間

８月４日、駅のホームで、学生たちを笑顔で出迎えるホストファミリーの姿。異国の地からやってきた学生たちを前に、緊張した面持ちで勇気を出して「Nice to meet you」と話し掛けると、「ハジメマシテ!!」と日本語が返ってきて思わず苦笑い…そんな、どこかぎこちない対面があちらこちらで見られ、学生とホストファミリーの『真夏の12日間』がスタートした。

学生交流は毎年交互に両市を行き来しており、今回、本市を訪れたド市の学生は、15歳から20歳までの９人と引率者１人の計10人。期間中は、それぞれ市内の家庭にホームステイしながら、日常生活の中でホストファミリーと様々なことを体験。また保育園や高校への訪問、歓迎交流会、ドイツ文化発表会、上山レディースセミナー「けやきの森コンサート」への参加などを通して、多くの市民と交流を深めた。

「違う国に住む家族のような存在。心の距離は確実に縮まっている」

「家族の一員となり、日本・上山の日常生活を体感できるのがホームステイの魅力」。学生たちは口を揃える。今回初めてホストファミリーを引き受けたのは10家族中３家族。ド市からの学生たちを引き受けて５回目となる大沢義彦さん（金瓶）一家を訪ねた。妻・みゆきさんが自らを「井の中の蛙が世界に飛び出した」と表現する通り、以前は国際交流には全く縁がなかったが、友人の勧めで６年前に思い切って引き受け、その後も手紙や電話で交流を継続。知り合ったみなさんと再会するため、これまで２度ド市を訪れるなど、小さなきっかけで芽生えた『絆』を今でも大切に育み、交流の楽しさにすっかり魅せられている一人だ。

最初は言葉や食事をはじめ、生活習慣や文化の違いからホームステイを引き受ける上での心配ごとは尽きなかったという。しかし今では「英語は片言しか話せないけど電子辞書を片手に何とかなるもの。普段の生活でもお客様扱いせず、我が家のスタイルに合わせてもらっている」みゆきさんはそう笑い飛ばす。

上山レディースセミナーでの記念写真。（８月12日）一行は上山滞在中、多くの人々と笑顔で交流

８月４日から15日まで、海外友好都市ドイツ・ドナウエッシンゲン市から学生訪問団10人がやって来た。両市の交流11年を迎え、これまで人々の心の中に湧き出た小さな泉の数々が、時を越えて大河ドナウの様に脈々と今に流れている。ホームステイの醍醐味、そして交流し続けることの大切さを再確認した12日間に密着した。

ドイツ文化発表会で学生たちはドイツの学校や交通機関、食事、お祭りなどについて発表し、参加者たちは文化や生活習慣について理解を深めた（８月10日）

保育園では、初めて体験する給食を箸（はし）で上手に食べた。子どもたちが、練習したドイツ語で「グーテンモルゲン（おはようございます）」とあいさつすると学生たちは大感激!!「忘れられない思い出になった」と一行

涙があふれたお別れの瞬間。（８月15日）「素晴らしい時間を過ごすことができました。上山での思い出を支えてくれたホストファミリーのみんなありがとう」学生たちは日本語で感謝の気持ちを伝えた

「英語が前より通じた。彼は日本文化について詳しく、逆に無知な自分に気づいた（みなみさん・17歳）」「少しずつドイツに興味がわいてきた。部活でしている柔道をドイツでも試したい（みのりさん・13歳）」回を重ねるごとに目に見えて表れる国際交流に対する子どもたちの心境の変化に両親は目を細める。

「素敵な家族に出会えて幸せだった。両国の様々な違いはあるけど、お互いが家族や友だちになれることを実感した。日本語を勉強してまた上山に戻って来たい」と大沢さん宅に滞在したマックス・ヴィルヘルムさん（17歳）。「ド市のみんなは、違う国に住む自分たちの家族や親戚みたいな存在。交流を重ねるごとに『心の距離』は確実に縮まっている。交流は継続することが大切」と大沢さん。食卓を囲むいつもより１人多い家族みんなの輝く笑顔が、充実した日々を物語っているようだった。

様々な形で着実に広がる草の根交流 心の中に湧き出た泉が今、脈々と…

一方で大沢さんは「新しいホストファミリーが少なく、もっと多くの人にこの楽しさを味わってもらう工夫や、より若い頃から外国に触れる機会を作るために、中学生をもっと交流に巻き込んでは」と話し、「周りからは大変でしょ？と言われたり、交流に興味はあるけど様々な心配から引き受けを断念した知り合いもいたりしたので、それ以上に得るものがたくさんあることを自分の言葉で伝えていきたい」と続ける。

これまでの交流に参加したことがきっかけで、海外への留学や大学の国際関係学部への道を選んだ上山の若者たち…。時間を見ては有志で集いドイツの話に花を咲かせたり、実際にド市を訪れたりしたホストファミリーのみなさん…。学校で「JAPANクラブ」を結成し、日本語を学んだり日本の文化に触れたりしているド市の若者たち…。お互いの草の根交流は様々な形で着実に広がっている。両市が友好都市の盟約を結び11年目を迎える今、これまで人々の心の中に湧き出た小さな『絆』が集まり、やがて一つとなり、時を越えて今、大河ドナウの様に脈々と流れている。